

Web 資料 1

演習のヒント

第 2 章

【演習 1】

- ① 『万葉集』の音仮名巻と『源氏物語』とでは、コーパスのサイズ（総語数）が異なる。それぞれのコーパスでの助動詞の粗頻度（コーパスに出現した頻度そのまま）ではなく、1万語あたりの相対頻度（コーパスの総語数で割ってから1万を掛けたもの）で比較するとよい。
- ② 助動詞の「す」に四段活用と下二段活用の二種類があることに注意しよう。
- ③ 打消推量を表す助動詞として、平安時代に「まじ」がある。奈良時代でこれと類似の意味を表す助動詞は何だろうか。奈良時代と平安時代とで類似の意味を持ち、異なる形で対応する助動詞はほかに何があるだろうか。沖森（2010）「付表 11 助動詞の変遷」などを参考にまとめよう。
- ④ 視覚による判断・推定を表すのに平安時代では「めり」を使用するが、奈良時代では次の1例しかない（連用形接続であり、確例としがたい）。

乎具佐勝ちめり（巻 14・3450、10-万葉 0759_00014,30830）
(乎具佐可知馬利)

それでは、奈良時代で視覚による判断・推定を表すのにどのような表現を用いていたであろうか。小田（2015）第7章などを参考にして調べてみよう。

【演習 2】

- ① 「下恋」の「下」は「心」という意味であるが、どのようにしてこの意味が派生したのだろうか。また、奈良時代で「心」を表す語は他に何があるだろうか。『時代別国語大辞典 上代編』で調べてみよう。
- ② 「妻恋」をしている主体に注目しながら、この語が使われている歌とその解

積について調べてみよう。

- ③ 「恋草」「恋衣」について、それぞれ、構成要素同士の関係はどうなっているだろうか。

【演習 3】

- ① 「文語下二段-ア行・ヤ行・ワ行の末尾の万葉仮名の表記」を調べるには、
例題 3 の手順と同様に Excel の RIGHT 関数を使うとよい。
- ② ア行・ヤ行・ワ行で使用される万葉仮名を、『時代別国語大辞典 上代編』
「主要万葉仮名一覧表」で確認しよう。
- ③ 次の例の下線部は「越ゆ」の連用形であり、ヤ行のエの仮名で表すべきところだが、ア行のエの仮名である「衣」が使われている。これはなぜだろうか。

岩根踏み山越え（巻 18・4116、10-万葉 0759_00018,36970）
(伊波祢布美也末古衣)

- ④ ア行・ヤ行・ワ行の音節の統合の歴史について、沖森（2010）第 2 章などで調べよう。

参考文献

- 沖森卓也編著（2010）『日本語史概説』（日本語ライフ ラリー）、朝倉書店
小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』、和泉書院
上代語辞典編修委員会（編）（1967）『時代別国語大辞典 上代編』、三省堂

第 3 章

【演習 1】

1.

- ① 上接語の一覧を作成したいので、「ず」のク語法は「後方共起」に回し、「キー」を上接続語にしたい。上接語にどのようなものがあるかわからない（= だからこそ調べる）ため、「キーの条件を指定しない」のチェックボックス

をオンにしよう。

- ② 時代ごとに並べ替えた時点で傾向差は見られるはずだが、ジャンルについても考えてみよう。
- ③ 「ず」のク語法が多く見られる作品のジャンルから考えると、他の作品の例においても、出現環境に一定の条件があることが予想できる。それを確認するには「本文種別」を利用することが役に立つだろう。
- ④ 『奈良編』でも同様のデータ抽出を行い、上接語一覧を作成して比較してみよう。円グラフを作成し、頻度1位、2位の語が全体の何割程度を占めるか、まずは視覚的に確認しよう。また、両時代で出現頻度に大きな違いを見せる語はないか、探してみよう。

2.

- ① データ作成時、「ず」のク語法は、「前方共起」に回すとよい。
- ② 「に」以外の例がさほど多くなければ、実例を確認し前後文脈まで含め、固定的な表現形式が見つけられるか観察しよう。検索結果の「キー」を昇順・もしくは降順に並べ替えるだけでも確認できる。
- ③ **演習 1** の1.の調査結果からは、『奈良編』では高頻度であったのに、『平安編』では頻度が下がる上接語が見つかる。そのような変化と、ここでの調査結果とを関連付けられないだろうか。

【演習 2】

1.

- ① データ作成時、連用形イ音便は「前方共起」に回すとよい。
- ② データからタ行・イ段以外の語を探すにあたっては、上から順に探しても手間のかかる量ではないはずだが、もし量が多すぎる場合は「語彙素読み」列で並べ替え、まずタ行の語を削除する、という方法もありうる。
- ③ ピボットテーブルの「行」を「語彙素」とし、一覧とその頻度を確認したのち、「列」を「成立年」「作品名」とすると、作品・年代ごとの流れを見ることができる。

2.

- ① まずはウ音便、撥音便それぞれのデータを作成し、共通の語がないか比較してみよう。
- ② 一般的な集計では「語彙素」を集計することが多いが、例えば助動詞「き」は終止形はカ行(き)、連体形はサ行(し)、というように音が変わるが語彙

素としては「き」としてまとめられてしまう。音便現象はあくまで音の問題であるため、語彙素でまとめてしまわず、実際の音形態ごとに見ていく方がよい。このような場合は、「語彙素」ではなく「キー」で集計してみよう。語彙素で集計したかぎりでは同じに見えていたものに、違いが見えてくるかもしれない。

【演習 3】

- ① 断定の助動詞「たり」と完了の助動詞「たり」は、検索条件の指定においては品詞や語彙素は区別がつけられない。前方共起を「名詞」「形状詞」とすれば、これらに接続する「たり」は完了の助動詞ではないので結果的に区別できるが、最初から断定の「たり」のみを指定する方法の一つとして「活用型」を検索条件に採用する方法がある。断定の「たり」の活用型は「文語助動詞-タリ-断定」となっている。
- ② 『平安編』での検索結果から、どの程度用例があるかを確認し、数だけでなく実際の語形に特定の傾向がないか、確認しよう。

【演習 4】

1.
 - ① 「検索対象を選択」の画面において、『平安編』では作品名の下に「本文種別」の一覧があり、「会話」「歌」「詞書」「手紙」「古注」「地の文ほか」が選択できる。必要なもののみにチェックを入れよう。
 - ② ヒットする用例はさほど多くはないので、実例を読み込み、共通性を探してみよう。下二の「給ふ」の後の表現に注目すると、一定の特徴がみられるものが多いはずである。
 - ③ ②での特徴で説明しにくい例として残るものは、特定の作品に偏りそうである。その作品ジャンルについて考え、説明を試みよう。
2.
 - ① **演習 4** の 1.から引き続いて調査を行う場合、「本文種別」が絞られた状態になっているため、これを元に戻そう。
 - ② 語彙素と作品名が一覧できるようにピボットテーブルを作成し、「思ふ」「見る」以外の例が採集できる作品がないか探してみよう。『平安編』全体で 1 例しか見いだせないような語を多く含む作品はどれだろうか。

第 4 章

【演習 1】

- ① それぞれ語彙素と語彙素読みを指定し検索をかけ、作品別の頻度や使用比率（7 語の合計に対する各語の比率）を一覧できる表やグラフを作成する。1 万語あたりの調整頻度で見るのでよい。作品によって、〈普通ではなく変わっているさま〉の描写に用いられる語・語種にどのような偏りが見られるのか、解説 1 の 4. にある作品全体の語種比率も参考にしながら、語種と文体との関係について考察しよう。
- ② 和語「「怪（あや）しい」「怪（け）しい」「浅ましい」と漢語「奇異」「奇怪」「奇特」「不思議」との間に、意味・用法、使用場面など、何らかの違いが見出せないだろうか。
- ③ 〈普通ではなく変わっているさま〉を表す語彙には他にどのような語があるだろうか。『日本古典対照分類語彙表』を利用し類義語を調査しよう。
- ④ ③で調査した〈普通ではなく変わっているさま〉を表す語彙について、『日本古典対照分類語彙表』の見出し語と『日本語歴史コーパス』の短単位・長単位との異同に注意しながら、『鎌倉編 I 説話・随筆』で用例を検索してみよう。また、より多くのデータから〈普通ではなく変わっているさま〉を表す語彙における和語と漢語の出現状況について把握しよう。

【演習 2】

- ① 助動詞「(さ)す」「しむ」は、(1)語彙素「せる」・品詞「助動詞」、(2)語彙素「させる」・品詞「助動詞」、(3)語彙素「しめる」・品詞「助動詞」、のよう指定期して別々に検索する。
- ② 「す」と「さす」の使い分けは、接続する動詞の活用の種類によっている。ここでは「しむ」との対比を見ることに主眼を置き、「す」「さす」対「しむ」で頻度を比較しよう。「す」の検索結果の最終行の下に「さす」の検索結果、またその下に「しむ」の検索結果を貼り付け、1 枚のリスト表を作成すれば、三つの助動詞を一度に集計できる。
- ③ リスト表の「巻名等」を使い、②の結果を説話単位に振り分けよう。「(さ)す」を多用する説話、「しむ」を多用する説話を抽出し、一文の長短や、主

語の明示・非明示、文の特徴に注目し、文体の実態について考察しよう。

【演習 3】

- ① 例題 3 で「聞く」の意味を《聴取》《承知》《質問》とまとめたように、『日本国語大辞典 第二版』の記述を参考にしながら「尋ぬ」の意味をまとめよう（参考文献：森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店）。
- ② 「尋ぬ」の用例を検索し、主語・目的語は何か、会話であれば聞き手は誰か、といった文脈にも目を向けながら、①に従って用例を分類しよう。
- ③ 「聞く」には、「尋ぬ」「問ふ」の他にどのような類義語があるだろうか。『日本古典対照分類語彙表』を利用し類義語を調査、『日本語歴史コーパス』で検索してみよう。

第 5 章

【演習 1】

- ① 例題 1 の手順を参考に、文末から 1 語の位置にある動詞を、「活用型」の「大分類」を「文語サ行変格」として絞り込もう。
- ② ①について、「活用形」の「大分類」を「終止形」「連体形」としてそれぞれ検索しよう。
- ③ 文末が「終止形」「連体形」となっている例が、それぞれどんな語に何例ずつあるか確認し、「本文種別」との関係から考察してみよう。
- ④ ③の考察では、終止形、連体形それぞれの用例も確認しよう。

【演習 2】

- ① 「品詞」の「大分類」を「動詞」、「活用形」の「大分類」を「連用形」として検索し、データをダウンロードしよう。
- ② ダウンロードしたデータを Excel で開き、ピボットテーブルを用いて、「活用型」を「フィルター」に、「語彙素」「キー」を「行」に、「キー」を「値」に入れて、表を作成しよう。
- ③ 表のフィルターから、「文語四段」を選択し、語の末尾に着目し、現代語と

は異なる音便の例がないか探してみよう。例えば、「文語四段-カ行」の「行く」の音便形は現代共通語では「いっ(て)」であるが、『虎明本狂言集』には「い(て)」の例が多数見られる。

- ④ なお、②のピボットテーブルで、「行」の指定に「活用形」を加え、「連用形 - ウ音便」「連用形 - 省略」等の情報から、音便の種類ごとに考察することもできる。

【演習 3】

- ① 「検索対象を選択」で「室町 - キリシタン」の「コア」にチェックを入れ、**例題 3**と同じ手順で和語の副詞を絞り込もう。
- ② ダウンロードした Excel データから、語彙素がすべてひらがな表記のものに着目してオノマトペを探そう。
- ③ どのようなオノマトペがみられるか、現代でも使われているもの、現代では使われていないものにわけて考察してみよう。

第 6 章

【演習 1】

- ① **例題 1**の手順を参考に、「品詞」の「中分類」を「助詞-終助詞」と指定してデータを取得し、会話文での出現率を算出しよう。
- ② 助動詞の場合は古典文法の助動詞と口語的な助動詞で会話文使用率が大きく異なっていたのに対して、終助詞はそうではないのはなぜだろうか。『日本語文法大辞典』(山口明穂、秋本守英編、2001、明治書院) や『日本語文法事典』(日本語文法学会編、2014、大修館書店)などで「終助詞」の性質を調べ、各語の地の文での出現数を見つ、考えてみよう。
- ③ 助動詞の場合は、洒落本でも「なり」や「き」など古典文法の助動詞の用例が多くみられるのに対して、古典文法の終助詞は、なぜ少ないのであるか。洒落本の会話文・地の文の文体や、終助詞の性質を踏まえて、考察してみよう。

【演習 2】

- ① **例題 2**と同じ手順で助動詞・助詞のデータを作り、ピボットテーブルの列の見出しを、「地域」から「性別」に変え、どの語に性別による偏りが見られるか確認してみよう。
- ② 性別による偏りのある語について、どのような人物が、どのような文脈で用いているか、実際の用例を確認してみよう。その際、必要であれば、「ページ番号」をもとに底本である『洒落本大成』の本文にあたるなどして、その人物に関する記述を確認してみよう。
- ③ 『日本国語大辞典第二版』や、『日本語文法大辞典』(山口明穂・秋本守英編、2001、明治書院)、『増訂 江戸言葉の研究』(湯澤幸吉郎、1981、明治書院)などで、その助動詞には、使用者・意味・用法の観点から、どのような特徴があるとされているのかを確認してみよう。

【演習 3】

- ① 『室町編』と『江戸編』の「旦那」という語の用例を実際に確認し、どのような文脈で、どのような意味で用いられているか、特に『室町編』で用いられている用例に注意して、推測してみよう。
- ② 『日本国語大辞典第二版』や『時代別国語大辞典（室町時代編 3）』(室町時代語辞典編修委員会、1994、三省堂)などで、「旦那」の室町時代での意味・用法や、意味の変遷状況などを確認し、用例の状況と照らし合わせてみよう。
- ③ そのような意味の変化が、頻度の増加とどのようにかかわるのか、意味分野や指す対象の広さなど、さまざまな観点から考察してみよう。

第 7 章

【演習 1】

1.
 - ① 『明治・大正編』を対象とした検索結果のデータを見ると、音訳した外来語と意訳した漢語のどちらが先に出現し、どちらが一般的になるだろうか。
 - ② 外来語と漢語との間に、意味、用法、使用場面、使用者など、何らかの違いが見出せないだろうか。
 - ③ 検索によって得られた用例を見ると、「庭球」と書いて「テニス」と振り仮

名が振ってあるなど、漢語と外来語とが、本行の語と振り仮名の関係になっている例がある。また、「ハンカチ」には「ハンカチーフ」「ハンケチ」などの変異形が見つかる。これらのことから、西洋語の借用においてどのようなことがあったか、考えてみよう。

- ④ この三つのペア以外の、具体物を表す外来語と漢語のペアを取り上げて、調査と考察を行おう。

2.

- ① 「モラル」や「パッション」が使われた前後の文脈で、言い換えや説明に用いられている語句を抽出してみよう。
- ② ①で抽出された語句に含まれる漢語の用例を、『日本語歴史コーパス』で検索して、その意味・用法を、「モラル」「パッション」の意味・用法と比べてみよう。
- ③ 「倫理」「道徳」、「感情」「情」「欲情」などの漢語の用例を検索し、その意味・用法を、①②の外来語や漢語と比べてみよう。

【演習 2】

1.

- ① 「活躍」がはじめて現れる時期の用例の意味・用法と、頻度が増加していく時期の用例の意味・用法を比較してみよう。
- ② 「躍動」「活動」についても、「活躍」の場合と同様の調査と考察を行おう。
- ③ 「活躍」「躍動」「活動」の三つの漢語の定着過程を比較検討し、考えられることをまとめよう。

2.

- ① 「努力」という語の頻度の増加の過程を確認し、その増加前と増加後の用例の意味・用法を比較してみよう。
- ② 『明治・大正編 I 雑誌』で、語彙素読み「ツトメル」（語彙素「勤める」と「努める」）を検索し、得られる用例の中で、語彙素「努める」の占める比率の、年次による推移を確認しよう。
- ③ 「努力」の動詞用法の用例と、「努める」の用例とは、意味・用法が同じだろうか、異なるだろうか。「努力」と「努める」の関係と、その変化の過程について、考えられることをまとめよう。

参考文献

田中牧郎（2006）「「努力する」の定着と「つとめる」の意味変化—『太陽コーパス』を用いて—」（倉島節尚編『日本語辞書学の構築』、おうふう）

【演習 3】

1.

- ① データ作成の手順は、**例題 3** で、助動詞「なり」と「だ」について行った手順を参考に工夫しよう。
- ② 文語助動詞「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」について、頻度の減少の時期や速度が、語によってどのように異なるか、把握しよう。
- ③ 文語助動詞のうち、比較的後代までよく使われるものの頻度の減少過程と、口語助動詞「た」の頻度の増加過程とを、対比的にとらえよう。
- ④ ②③でとらえた推移から、考えられることをまとめよう。

2.

- ① 「である」の後接語の調査によって、「あります」体と「である」体の実態を把握する手順は、**解説 3 の 2.**を参照。
- ② **解説 3 の 2.**および**3.**に記される『太陽』の実態と、それ以前の『国民之友』の実態とをつないで、明治中期～後期（19世紀末期～20世紀初期）における、「あります体」から「である」体への推移をとらえよう。